

北周・明帝期の庾信（上）

——不安と希望の交錯——

加藤 國安

（漢文学研究室）

はじめに

孝閔帝弑虐後、宇文護の政治的求心力は、一時的に弱まった感がある。それは前稿で述べたように、^①宮廷人脈を再整備しようとした宇文護が、有力者から敬遠され協力を得られなかった点に明瞭に表れている。宇文護暗殺計画の陰の主役の孝閔帝を、逆に弑した宇文護だったが、世間の支持は得られず政権の運営にかなり苦慮したようだ。そこで彼が担ぎ出したのが、先帝宇文泰の長男ではあったが正室の子ではないという理由で皇位から外されていた、かの英名の誉れ高き二十四歳の宇文毓（Ⅱ後の明帝）だった。五五七年、九月甲子に即位。明帝のこの即位に当たっては、本来なら明帝の外戚の元勳・独孤信が相当の政治力を持つところだが、既に最初の肅清で自決に追いやられていた。^②強力な対抗馬のいない今、宇文護は一応思うとおりに明帝を操縦できる筈だった。

では宇文護が、この英邁な宇文毓を新帝に立てた狙いはどこにあったのか。宇文護のこの時の意図を窺わせるのでは、と思われる一資料があ

る。『周書』明帝本紀に、即位直後の十月のこととしてこう記される。

（五五七年）冬十月、（明帝は）…柱国・陽平公李遠に死を賜る。

李遠とは、前稿で述べた二回目の宇文護殺害未遂事件の首謀者、あの李植の父である。李遠といえは、古くから太祖の側近として活躍し、孝閔帝世継ぎの際の朝議の折に、孝閔帝の対立候補だった明帝の、その外戚である独孤信を威嚇する大芝居を打って、衆議を孝閔帝世継ぎの方へ大きく牽引した人物として知られる。そんな人物が、なぜこの時期死を賜らねばならなかったのか。『同』卷25李遠伝を見ると、その詳しい理由・時期等を何も明記せず、ただ「是に於いて（宇文）護は（李）植を害す。并せて（李）遠に逼りて自殺せしむ」とあるだけだ。が、右の明帝本紀によれば、その執行は明帝即位の直後のことだったと知れる。私

はここにひとつの疑問を感じるのである。
というのは、『周書』明帝本紀を見ると、明帝は九月に即位と同時に「天下を大赦」し、即位の祝典を行い、さらに十一月には、太廟と円丘

の祭祠を行っている。新帝の慶祝の盛り上がるこの時期に、なぜ李植の罪を迫って、その父親に急ぎ「死を賜」らねばならなかったのか。この李遠は、もともと明帝にとって何の関係もなかった人物だ。「死を賜る」直接判定を下したのは、明帝自身ではなく、李遠伝に「護は、(李)遠に逼りて自殺せしむ」と記されるように、命を狙われた宇文護本人の意志に発する。明帝本紀に、「冬十月、…柱国・陽平公李遠に死を賜る」とたった一行記されるだけの資料だが、この急で突然の嚴刑の意味を慎重に探っていくと、どうも「十月」という数字が頗る意味を持つように思われる。この数字に注目することで、この事件の裏に隠された宇文護の強い政治的意向を推測できるのではないか。

宇文護は、なぜこの祝祭の儀の時期に、敢えて重鎮李遠を血祭にしなければならなかったのか。処分のあり方として、李植らによる暗殺未遂罪を親族にまで及ぶ重罪と判断、西魏||北周の古将たる父親の李遠まで斬ることにしたのはある。しかし、新帝の慶祝のこの時期に早速明帝をして執行させたという点に、単なる嚴正かつ速やかな処置という以上の、何か政治的示威のようなものを感ずるのだ。即ち、宇文護は新帝の誕生したこの時を逃さず、皇帝の威光を利用して、公儀に刃向かう叛逆者には断固たる態度で臨むことを天下に示し、己の政治的正統性と権力を改めて誇示してみせるとともに、政界に睨みを効かせ綱紀の肅正を図ったものと推測される。さらにいえば、聡明との評判高い明帝自身に対し、就任早々において宇文護の政治的実力を、知らしめんとしたという点でもあろう。この政治的示威は世の慶祝気分が薄れ、また明帝も帝位に慣れ自立的自覚を持ち出す時期になってからは、効果がなく遅すぎる。自ら主動的な役割を果たして新帝を誕生させたこの時期こそ、強引に奪取した感のある丞相兼皇帝の補佐役としての己の正統性を、改めて朝廷の内外に認知させ印象づけもでき、ひいては今回の事件による

失地回復をも狙うことができよう。この急な李遠処分には、こうした背景があったのではと考えられる。

それにしても、この危ない従兄・宇文護に擁された明帝は、その後どのようにして自己の政権の基盤を築いていくのだろうか。また、そんな不安定な権力分化の下で、庾信の生き方はどのように左右されていくのだろうか。小論では、そうした点について、論じていくこととしたい。

一 「旧を思う銘」——梁の觀寧侯・蕭永の死——

宇文護がまたも己の手を暗い血で汚し、明帝を誕生させたその四ヶ月後。年明けて明帝の二(五五八)年正月のことであった。まだ正式の年号はなかった。北周の打ち続く陰湿な権力闘争に、梁朝破滅の過去を重ね合わせながら、深い憂いを抱いていた庾信にとって、さらに自らの身边において深い悲しみが起きた。梁の觀寧侯・蕭永しやうえいの死である。入北以来、庾信はこの梁朝の旧王族の一人觀寧侯・蕭永らと、異国での慣れぬ暮らしを互いに慰め励まし生きてきたらしい。それだけにその死は、庾信にこれまでの来し方を万感の思いをもって想起させただけではなく、「旧を思」えば思うほど、今日の新しい政治状況への不安をも掻き立てさせただろう。そうした深い悲しみを、觀寧侯・蕭永の靈前に捧げたのが、「思旧の銘」である。

この「思旧銘」に関する専論は甚だ少なく、例えばこの作品がなぜ「銘」の形式となっているのか等を探った論文がある程度だが、^③北周初の複雑な政治状況までは踏まえられていない。そこでここでは、この作品を、北周の臣となったとはいえ、不安定な政治状況が続く中で、庾信がその奥にどんな心情を抱いていたのか、彼の内面を窺う上で格好の資料となりうるのでは、という目算をもって取り上げてみたい。

「本銘は、全編素描風に描写されており、彫琢を重視していない」とする向きもあるが、^④庾信の作らしく多数の典故で埋められており、あっさり読める代物ではない。本銘の読解のためには、まず清・倪璠の付した^⑤夥しい典故を参考にすることより始めるしかない。その膨大な倪注の読解作業を終えたら、次にはそれらの典故の意味を、原文の銘文の文脈に当てはめ、さらに觀寧侯・蕭永や庾信らの置かれた心理状態や当時の政治状況等をも考慮しつつ、慎重に語意を一つずつ確定していく。これを全編に渡って繰り返し続ける。この積み重ねにより、初めて原文全体の意味する所や、作者の心情がほの見えてくる。以下、甚だ不十分だが、本銘の内容を少しずつ分けて読解し、庾信の心情の變に迫ってみよう。原文は、典故による駢驪文なので、直訳体の書き下し文では意味が掴みにくい。そこで、やや意識になるが、訳詩の体裁に置き換えて掲げることとする。中には意味不明な部分も若干あり、また複数の意味に取れそうな箇所もあるが、一応の訳詩を付してみる。

全体は、内容的に「序」と「銘」に大別される。その「序」だが、実際には中編の文章と呼んだ方がよいほどの分量で、さらに小序・四つの段落・跋から構成される。

まず、この「小序」にあたる部分では、死者の没年や名前等が明記、確認される。そして、人々の深い悲しみが端的に表明される。いわば、前書きにあたるものだ。

周の明帝の 戊寅の年（廿二年）

星 監德（二月）にありしとき

梁の元の觀寧侯

蕭永殿の 亡くならる

歳在撰提

星居監德

梁故觀寧侯

蕭永卒

ああ 悲しいかな
人は 金銀 玉石にあらず
時を越え 長らうわけもなし
なにゆえ 人により
享けた命に 違いのあるや

次いで、第一段落。梁滅亡後、北朝での囚われの生活を送ることになつての、生活環境の激変による精神的なショックを描く。

国滅び 楼閣傾きては
亡国の琴の音に涙し
ひとたび 国 離るれば
異国の鼓の音に 悲しみ深し
項羽のごと 晨に目覚め慷慨し
李陵のごと 分かれ道にて 心迷う
韓の王孫のごと 敵国に人質とされ
楚の公子のごと 異郷に軟禁さる

ああ 我らが運命の 険しさよ
秋の気など 借りずとも
深々と 憂いに満つる この胸ぞ

嗚呼哀哉
人之戚也
既非金石所移
士之悲也
寧有春秋之異

高台已傾
稷下有聞琴之泣
壯士一去
燕南有擊筑之悲
項羽之晨起帳中
李陵之徘徊岐路
韓王孫之質趙
楚公子之留秦
無復窮秋
於時悲矣

第一段落には、庾信の三部作（Ⅱ「哀江南賦」「擬詠懷」「擬連珠」）と共通する表現が少なくない。まず「壯士一去」云々は、「哀江南賦」序（以下、「哀」序などと略す）に、「壯士還らず、寒風 蕭瑟たり」とあり、「擬連珠」其24（以下、「連」其24などと略）に、「荆軻の燕市に別るるや、悲しみ自ずから勝えず」、「擬詠懷」其10（以下、「詠」其10

などと略)にも、「李陵、此れ従り去り、荊卿、復た還らず」等とある。次に、「項羽の晨に帳中に起き…」は、「詠」其26に、「誰か言う、気は世を蓋い、晨に起きて帳中に歌う」という。さらに、「李陵の岐路に徘徊し…」は、「哀」45節に、「李陵の双鳧、永に去る」とあるほか、右述した「詠」其10にも用いられている。第一段落だけを見ても、三部作と「思旧の銘」とは、発想や情感において同一基調にあることを窺わせる。この一段は祖国の梁から異国に赴き、そのまま軟禁。祖国の滅亡の下、帰順か抵抗かの厳しい岐路に直面し苦悩する様子などを、故事を巧みに連ね合わせ生き生きと描いたものといえる。

続いて、第二段落を見てみよう。ここでは、梁朝滅亡に至る経過、及び天地に向けられた梁の遺民の深い痛恨の思い等が比喩豊かに綴られる。

魚や鳥の 異常な様にも	況復魚飛武庫
政変 反乱の兆し ありありと	預有棄甲之徴
されど 国勢 盛り返すに至らず	鳥伏翟泉
ああ かくして ついに	先見横流之兆
星の定めか 呉(Ⅱ建康)は滅び	星紀呉亡
古えの星占い通りに 楚(Ⅱ江陵)も滅す	庚辰楚滅
紀侯のごと 敵を降せず 祖国を退去し	紀侯大去
鄢子のごと 俘虜となり 連行されて帰るなし	鄢子無帰
原野 沼沢に 激しく戦闘するも	原隰載馳
輶轅の坂にて 永別するは痛ましき	輶轅長別
兵士ら 武器 甲冑 打ち捨てて	甲裳失矣
祖国の軍船 顧みず ついに降伏す	餘皇棄焉

大河は 河南の辺りで 大氾濫	河傾酸棗
貴賤を問わず 流さるる	杞梓与檇櫟俱流
蓬萊の理想の世界 目指せるも	海浅蓬萊
その海も思慮浅ければ 結局	魚鼈与蛟龍共尽
たれ一人生きえず とともに死す	

たとえ反魂香 立派な宮居に焚くも	焚香復道
その遊魂 甦らせることなどできようか	詎斂遊魂
車いっばい 酒 積み込んで	載酒属車
死ぬほど あおったところで	寧消愁氣
この愁い どうして消すことできようか	

見よ 蘭も 蓬も	芝蘭蕭艾之秋
世の秋に感じてか みな枯れ死し	形殊而共瘁
鳥も 魚も	羽毛鱗介之怨
この世の怨みに 胸傷め	声異而俱哀
声こそ違え むせび泣く	

そも 天とは 何ぞや	所謂天乎
ただの青き虚空なるか	乃曰蒼蒼之氣
また地とは 何ぞや	所謂地乎
単なる心なき地塊なるや	其実搏搏之土
怨みを吞みしすべての者らよ	怨之徒也
天地のことわり 見えぬ今	何能感焉
時の心を どうして掴むことできようぞ	

しほめる鳥の たちばねは

風受けるも 役には立たず

枯れ死した 春の草木は

霜露の力を 煩わずまでもなし

凋残殺翮

無所仮於風颺

零落春枯

不足煩於霜露

これもやはり三部作と全く同じテーマである。同様の表現としては、「星紀、呉は亡び、庚辰、楚は滅す」が、「哀」37節の、「亡呉の歳は既に窮まり、入郢の年は斯に尽く」と同様。また「甲裳失い、餘皇棄つ」は、「哀」9節の、「湛盧、国を去り、餘鯨、水を失う」と同様だ。さらに、「所謂天とは……」云々の天道への激しい詰問は、既に度々指摘したように、「哀江南賦」「擬詠懷」と同一の口調である。「凋残せる殺翮」は、「連」其22の、「樊籠の鶴は、寧んぞ六翮の（広げる）期有らんや」に類する。また「零落し春に枯る」等の枯樹表現も、三部作及び「枯樹賦」等に少なからず見られる所だ。すなわち、この段落でも「思旧の銘」と三部作との関連は明瞭だといえる。

この第二段落は、梁滅亡の兆候、対西魏との戦争の惨敗と痛ましき犠牲者、強制連行、天道の不透明感、そして異国での精神的枯死状態等が多く生き生きとした比喻を用いて述べられており、本銘中で文学表現上最も生気に富む部分だ。内容的には、いわば三部作を凝縮した格好となっているが、この旧梁朝の一王族に対しても同様の口調で語られているということは、この悲劇的心情や言葉が決して庾信一人のものではなく、かつての梁の重臣らに等しく共通するものであったことを物語る。ただ入北した旧梁臣や人民らを襲った、この衝撃的な閉塞感や枯死的的精神状態等にかんがう言語を求めて格闘し、かくも生々しい筆致と修辭で綴り得た者が、庾信の外にはいなかったというにすぎない。

従来の庾信研究では、この三部作等を悲劇のどん底に苦悩する庾信自

身の個性的な表現と解し、これを基に非凡な悲劇の愛国詩人Ⅱ庾信という像を提示してきたかに思われる。しかし、別稿で既述したことのある庾信の「張侍中の述懐に和す」や、小稿の「思旧銘」という観寧侯・蕭永の靈前に献じられた作品、それに王褒の「庾司水の渭橋を修めるに和す」詩等をよく読むと、三部作等の作が庾信自身の内面を載せているのは無論だとしても、果たしてどこまでが庾信個人の心情に限定される言葉なのかは、再検討されねばならない。「哀江南賦」に見られる例の「太史令」的態度、また「春賦」等における宮廷文人としての公的筆致などを想起すると、当時のこの種の文人らの作は、一個人に超越する姿勢をとる（——当然のことだが、個人という視点が無いというのではない——）ものでもあることを、併せて認識の内に置いておく必要がある。このような『庾子山集』内外の他の作品の内容や、当時の時代的情況を抑えずに、例えば歴史的には明末以降に顕著にみられる、かの誇り高きごく少数の遺民文士のような、大勢から離れて抵抗する強烈な近代的個性を、この時代に読み込んでしまうことには抑制的態度がなければならぬ。

このように考えてみると、これらの悲劇的作品を庾信にのみ深く結晶した特異な心情表現と限定的に強調することは難しく、実は張侍中のものでもあり、また観寧侯・蕭永のものでもあり、王褒のものでもあるという、いわば旧梁臣のある一群内に共有されてあった心情を、庾信が史官のように集約・整理し、自らの内部での芸術的精練を経て、的確な言葉と形式を与えたというふうに多層的に理解した方が、諸作品の内実により合致するのではないかと思われる。現状に独りあらがい、自らの奥深くに抱え込んだ人知れぬ葛藤的心情を鋭く抉った言葉と捉えるのは、どこか近代的な自我表現のようで、新しい感性・思想のような気がする。これらの作品を一度庾信一個の孤独な深奥から、旧梁朝の文人らが心を

通いあわせた場へ解放し、ある群内の心情的葛藤をその中に含んだものの集約的言語化として解釈し直される必要がある。

ただ、このような世紀の悲劇を振り返り、長時間それに面と向かうということは、王朝に関する諸々の事柄を整理し記録するのが宮廷文人の常とはいえず、今度の政変で生じてきたあらゆる屈辱、あらゆる後悔、あらゆる悲惨等の生傷に強く耐えることが求められる。周囲の文人には文筆的資質を持ち合わせながらも、この作業に伴う心労や空虚さを思っただけで、筆を執る気がせしりごみしてしまったものも少なからずおろろ。そんな徒勞は愚かしいと耳元でささやく誘惑をはねのけ、また情念の泥沼にも呑み込まれずに、事態をよく整理・検証しつつ、その上で真摯な感情と格調高い哀調の辞をもって、一連の多くの著述を庾信が完遂させたことを考えると、この亡国の悲しみを真正面から受け止めた彼の誠実さ、内面的強さや包容力。また旧梁臣・人民らを等しく襲った極度の痛苦に再び耐えてでも、今次の体験の中に形象化せずにはおれない、何か重要な価値を見いだして想像力をはばたかせ集中力をみなぎらせる、庾信の姿を看取しないわけにはいかない。

庾信は、その鋭敏な感性や豊富な言語を通して、今回の異常な世界体験を深める力を自ら引き出しながら、世界解体時に飛散した多くの残骸を再統合してみることで、大きく変容しつつある世界に働きかけ、また自らとの距離を測り直し、世界との新しい関係のあり方を探ろうと苦闘する（「所謂天乎、…所謂地乎」）。その時、彼の言葉は安定的な言語習性を離れ、絶えざる不確定の潮流に身を投じその可能性を流動化させる。かくして、この段落に散りばめられるような、これまで見られなかった清新な比喻表現が多く生まれてきたのである。ここに無個性的な史官の記述では全くない、彼の個性を豊かににじませた著作が世に出る貴重な要因があったといえよう。

では、第三段落に進もう。ここでは、觀寧侯の逝去、葬儀、故居の風景等が描かれる。

その昔 梁の幕府 初めて開けるととき
創設の元勳たる 觀寧侯のもとには
賢俊ら 多く集まり
輝く未来に 頭を高々と翹げらるる
その後 運命変じ
北朝に寄留せられて 帰るなし
かつて侯に従いし 門人らも
そのもとを 立ち去りぬ

幕府初開
賢俊翹首
為羈終歲
門人謝焉

ああ 侯よ
病篤く ついに別れの辞告げ
黄泉の国へと とわに旅立たる
亡きから載せし 葬儀の車馬は
皆に別れて 城門離れ 郊外へ
家族 弔問客ら
遙かな冥路 悲しめり

至於東首告辭
西陵長住
山陽車馬
望別郊門
穎川賓客
遙悲松路

嵇康の庭園のごとき 侯の宅
なおも残す 楊柳の跡
王子猷の隱居所のごと
空しく余す 竹林よ

叔夜之山庭
尚多楊柳
王子猷之旧徑
惟餘竹林

王孫なる 觀寧侯よ
王孫葬地

君が眠りし

方為長樂之宮

その地こそ 長樂宮とならんことを

烈士埋魂

ああ 烈士の魂の 永眠の御所こそ

即是將軍之墓

わが將軍の墓なり

觀寧侯の梁での栄華と北朝での失意を対比的に捉えた後、この北朝で没し、葬送・埋葬されたことをいう。三部作における葬儀の表現としては、例の簡文帝の場合があるが、この觀寧侯ほど詳細な描写ではない。また建康の騒乱時に犠牲となった、庾信の「二男一女」らの死を悼む「傷心の賦」にも葬儀の表現が見られるが、こうして見ると、庾信の詩文には、この種の葬送・哀悼表現が頻出することに思い至る。それは亡国期の文人の執筆として当然のことではあるが、それにしても多い。

そこで、庾信の三部作や「枯樹賦」等について、この哀悼表現という角度から改めて通覧してみると、天地の死、国家の死、貴族体制及びその文化の死、王族の死、自己の象徴的な意味での死、家族の死、友人の死、將軍・兵士の死、民の死、暴徒の死。また比喻表現としてだが、日月星辰の死、山河・鳥獸・玉石・樹木等の死などがある。さらに後年になると、北周の武帝期より頻出する多数の墓碑銘もあり、まさに庾信の文集は葬送・哀悼表現で埋め尽くされている感がある。一人の文人の作品のうち、死をその最も重要なテーマとした人物というのは、中国のそれまでの文学史には、おそらくいないだろう。潘岳の「悼亡賦」、陶淵明の「形影神」等の作というのがあるが、それは彼らの関心の一部に過ぎない。賦の歴史から眺めてみても、漢の揚雄や司馬相如らの賦には、生の横溢という顕著な特色が見られたが、庾信の賦は死で覆われている。このように死という本来深い悲しみの情感に満ち、またこれまで余り扱われていなかったテーマを根幹に据えたことが、彼の作品に執筆の上で

溢れるほどの大きなエネルギーを与え、また雄弁な筆勢と個性的な言語表現、清新な比喻を多数生み出した要因だといえる。

ある意味では、これらは死の深淵より花開いた特異な作品といえるかもしれない。庾信は多数の死者を思い、また自身も生きている死者として、不当な死を呪い死を激しく告訴している。しかし、それは死に塗り込められてしまった狂おしい感情的叫喚などではなく、むしろ死を拒絶せんとする強い意志より発していることに注意しなければならない。大事なことは、一編の作品を書く度に、死の無明の境からさええ泉のように湧き上がる命の不思議な強靱さや可能性を、この人自身が身の奥深くで実感したということなのだ。これは、江南から移住させられた多数の旧梁民も、日々の羈旅暮らしの中で共にする思いであった筈だ。こうした苦境の中にあってもその奥に流れる生のエネルギーが、北周政治の変化とともに徐々にではあるけれども、江南の豊かな文化を北の野暮ったかった長安に、次第に根づかし活かす前向き力となって作用していたように思われる。が、これについてはもう少し先の検討に譲ることとする。

第四段落は、長年に渡り苦楽を共にしてきた觀寧侯との思い出や、また庾信の嘆きを述べる。

昔	ともに梁にありし時	昔嘗歡宴
侯と宴張り	風月めでし	風月留連
ああ 懐かしき	その日々よ	追憶生平
あたかも	眼前に甦りくる	宛然心目
今 我ら	この秦川に翼垂れ	及乎垂翅秦川
ともに	関河に留めらる	関河羈旅
悲しみの谷間に	心うなだれ	降乎悲谷之景

深き憂愁を 胸に抱く

実有憂生之情

美酒 酌む度に

美酒酌焉

やはり思うは 遙かなる建業の水

猶思建業之水

琴 かき鳴らす時

鳴琴在操

また思うは 故郷の鶴の舞い姿

終思華亭之鶴

ここに 重ねて 侯とも別れねばならぬとは

重為此別

ああ 哀しいかな

嗚呼哀哉

侯の逝けるは

麟亡星落

麒麟の滅び 星月の落ち

月死珠傷

珠の死ぬるかのよう

瓶罄壘恥

侯のため 生前何もできずじまいの

芝焚蕙嘆

我が身の 不甲斐なさを

君は退却し

侯 失うは 我が嘆き

再び帰らず

この段落の「終に華亭の鶴を思う」は、「哀」序にも「華亭の鶴喚く」とある。

そして、最後に跋の部分は、觀寧侯の魂の永遠ならんことをと祈願する。

この鐘を 徳水に沈めん

所望鐘沈徳水

願わくば 侯が声 風雲の中に甦らんことを

声出風雲

また この宝剣 豊城に埋めん

劍没豊城

侯が気の 天空の牛斗の間に

氣存牛斗

とこしえに あらんことを

徒に この地に留まり 雁を見送り

涙拭い 古え偲び

漣然思旧

ここに 銘文を捧げん

乃作銘云

以上が、本銘文の「序」に当たる。この後に「銘」が続く。内容的には、「序」と重複する部分が多いが、その形式に見るべき点がある。つまり、整然とした四言句にかつ押韻も揃えた形式で、侯の逝去の悲しみを改めて切々と、秀麗さと嚴肅さを兼備した表現で謳い上げている。

風雲 告げる中

風雲上惨

国都は 建康より 江陵に遷さるる

舟壑潜移

急激な 霜露の襲来に

駸駸霜露

君子らは 破局の迫るを憂う

君子先危

君は退却し

紀侯大去

再び帰らず

懷王不返

ついに その玉体 異国に埋められ

玉樹長埋

その風流 遠き日のことにぞなれりける

風流遂遠

昔いませし 楚の旧県

荀伯旧県

お上より賜りし 楚の領地

慶封餘邑

ああ 故郷は 万里の彼方

万里帰魂

汝が魂 何ぞ 楚の門に入れよう

修門詎入

侯が墓は 武庫の前に 横たわり

墳横武庫

その土盛りは 北の方 蘆龍を枕にす

山枕蘆龍

帰りたくとも 道遠く

思帰道遠

柩 返したくとも 従者なし

返葬無従

徒に この地に留まり 雁を見送り

徒留送雁

空しくこの墓におり 松の大きくなるを 見守るのみ

空靡長松

陵の東に植えし

平陵之東

梧桐の木も やがて 消え行く日もあらん

無復梧桐

ああ 松風の音 物寂しく

松声蕭瑟

とこしえに 秋風を呼び起こさん

長起秋風

昔 栄華の中で

疇昔隆貴

手に手を取り 語るも黙すも ともにあり

提携語默

古の詩人 阮籍 嵇康らを思い

託情嵇阮

脱俗の自然の心 捜し求む

風雲相得

酒も 池の水のごと 浴びるほど飲み

有酒如澠

いつまでも 心温もり 楽しかりき

終温且克

ああ 朝日の中 鳳は落ち

朝陽落鳳

広野に 麒麟死せり

大野傷麟

城は 悲しみに包まれ

佳城鬱鬱

侯は とこしえに秦に眠る

流寓於秦

山のこちらで 野辺送り

山陽相送

侯のみ残し 立ち去りぬ

惟餘故人

ああ 哀れ 未亡人

孀機縈緯

今後 誰がために 機を織る

独鶴孤鸞

一人残されし 奥方様よ

閨深夜静

閨房深く 夜も暗し

風高月寒

風は高く 月寒し

生平已矣

ああ 侯の生涯 ここに尽く

懐旧何期

昔 潘岳 故人を偲び

匣中弦絶

「懐旧の賦」を作る

隣人笛悲

今 我が身に そが訪れるとは

昔為幕府

知音 亡き今 音楽の遊びも空しかり

今成總帷

愛用の箱中の 弦も断たん

昔 梁の幕府に 輝ける君よ

今 黄泉の人とぞ なれりける

「銘」の本文のうち、「徒らに留まりて雁を送る」が、「哀」45節の「蘇武の一雁、空しく飛ぶ」と、また「独鶴孤鸞」が、「詠」其22の、「松を抱きては、別れし鶴を傷み、鏡に向かいては、孤鸞絶えんとす」と同典故である。

以上の考察より、「思旧の銘」が、三部作と心情的・発想的に共通することが確認される。では、なぜこうした共通性が多数見られるのか。筆者は「哀江南賦」をはじめとして、「擬詠懐」「擬連珠」の完成時期を「思旧の銘」が成った明帝二（五五八）年正月の、その僅か一―二ヶ月前頃と想定してきたが、これらがほぼ同時期に執筆されたということからすれば、個々の表現において少なからず類似するのは当然だといえる。

さて、「思旧の銘」を右のように読解してくると、明帝が即位して二ヶ月後の、庾信の心情がどのようなものだったか、ある程度窺えてこよう。すなわち、北周の臣となった庾信だが、彼の周囲の旧梁臣も含めて、亡国の恨みの情はこの頃もまだ生々しい傷跡を残し、容易に消えぬものだったことが知られる。かつて西魏の宇文泰の人徳に深く帰順した庾信だったが、帰順自体は異国の暮らしの単なる第一歩というに過ぎない。それで梁滅亡の悲劇の歴史が解消されるわけでも、また彼や旧梁臣らの心より苦悩が除去されるわけでもない。北周の悲劇的な権力抗争や親しい仲間の死など、何かと折に触れ梁朝のことが思い出されるや、北周の官にありながらも、胸奥では痛恨の思いや自責の念を新たにしな

ければならなかったのである。

実際、庾信ら旧梁臣らの心情を極めて複雑なものにした背景には、当時の北周の宇文護の軍事的独裁による政情の不安という面が小さくなくあっただろう。北周朝樹立後、朝廷内部で二度も大きな政争が続いたためか、国内では不穏な状態が続いていた。天子よりも一宰相が権力的に上位にあるという、不正常的な事態を引きずったままの軍事強権下の国に、もと華麗な宮廷文人だった庾信らが、劣悪な条件に堪えてこのまま寄留したいと願うはずもない。この国に自分の居場所はないと暗澹たる心情になれば、たちまち亡国の悲憤やら望郷の情などが蘇ってくるのは当然のことだったろう。機会さえあればいつか江南へ帰り、心静かに暮らしたい。そう願うのは自然なことだったと思われる。

二 明帝の文治主義への模索と庾信の「晴れるを喜ぶ」詩

異朝でともに不遇を慰め、また励ましあってきた観寧侯が、明帝二（五五八）年正月に没した後、庾信の境遇は孤独と苦悩を深めていくかに思われたが、事態は予想をはるかに越えて推移していった。青年皇帝・明帝の若く果敢な行動が、その大きな契機となった。この明帝の事跡については、過去の報告を調べてみると、史料の掘り起こしがほとんどなされてこなかったようだ。実際、明帝の生の風貌を伝える記事は、「明帝本紀」にはほとんどなく、ここからはその全体像は見えてきにくい。『周書』を通読すると、明帝関連の逸話のほとんどは、他の列伝の方に分散して記載されており、明帝の風貌を把握するためには、それらを丹念に拾い集める作業から始めなければならない。この作業を通し、明帝の風貌や治世をできるだけ再現することで、この時代下の庾信の表情を捉え

る何らかの手掛かりが得られるのでは、と考える。これが、小論の次の課題である。

まずは、「明帝本紀」中の新帝の詔から読んでみよう。

帝王の道は、寛大な仁政を実現してこそ、大事と考える。そこで、西魏時代に軽犯罪程度のみで、一度も重罪になっていない者。及び村民のうち一家に犯罪者がいただけなのに、それに連座して数家まで遠方に流された者については、すべて帰還することを有すべきと考える。

（明帝元年 十一月）

王者たる者、民を治めるにあたっては、四海の民族を同等に扱い、遠近の者ら一つに束ね、彼らを父母のごとくにいたわらない者はない。世が艱難だとして、略奪しあうなど、まことに悲しむべき事態だ。武成元年以来、略奪に遭い賊の仲間に入らざるを得なかった者は、皆放免すべきであると考える。

（明帝二年 二月）

右の詔勅からも明らかだが、「帝は、寛明仁厚にして、九族を敦睦し、君人の量有り」（『周書』明帝本紀）、また「帝は性、聡睿にして、識量有り」（『同』宇文護伝）等と記されるように、豊かな識見に富み王者としての風格を湛えた人物だったようだ。

その他の列伝を見てみよう。ある時、明帝は即位すると諸侯とともに、北周の大儒・盧辯の家を訪問した。儒者達は、これを大変な荣誉だと感激したらしい。「帝、嘗て諸侯と其の第に幸す。儒者、之を榮とす。」『周書』卷24 盧辯伝。また、やはり好学の徒で博学な劉志を重用し、大小を問わずよく下問したとも伝えられる。「世宗（明帝）、雅に儒学を愛し、特に欽んで之（劉志）を重んず。事の大小と無く、みな志

に委ぬ」『同』巻36 劉志伝)。明帝の好学ぶりを物語ろう。

明帝の風貌を伝えるエピソードの中で、最も生々としているのは、たぶん当代一級の儒臣・寇儁と談論した時の話だろう。

寇儁は、年は取っていたが、気持ちも頭もまだしっかりしていて、子孫らに教授するに、必ず礼典から始めた。明帝は儒教を重んじたので、寇儁を特に大事にししばしば恩賜を授け、じかに会ってみたいと思われた。儁もやむをえず朝廷に参内したが、明帝はなんと席を並べて座り、昔の洛陽のことを尋ねられた。儁は、身長は八尺もあり、髭も立派で容姿端正、齒切れのよい明朗な語り口なので、帝も談論しているうちに、ついしばしば膝を進めるほどだった。儁が辞去する時には、親しくその手をお取りになり、

「公は、年も徳もいずれも見事じゃ。朕は嬉しいぞ。これからも年長者の良き話は、公に所望しよう。時々ここへ来て、わが無聊を慰めてくれ。」

そして、輿を帝の面前に持ってこさせ、そこから乗るのを許され、左右を顧みていった。

「よいか。こういうことは、公にただ積善あればこそ、致しておるのじゃ。どうして今のみ重んじられるということでしょう。今後もずっと末代に至るまで、申し伝えて行行のじや。」

と。当時の人々は、みな帝のご威光に打たれないものはなかった。

〔周書〕巻37 寇儁伝)

と、時人の受けた爽やかな印象の一齣を記している。

明帝二(五五八)年の三月、北齊の殺人天子・文宣帝に愛想をつかし

たのだろうか。東境の北豫州の刺史が州を挙げて帰順してきた。北豫州といえば、北齊の都・鄴に近い重要都市である。早速、帝は後の隋の文帝の父で、当時は大將軍で小宗伯だった楊忠らを遣わし、これを迎えさせた。以後、楊忠は北齊の東境で奮戦し、北周朝内に次第に動かしがたい地盤を築いていく。こころばらく目立った交戦のなかった北齊に対し、北周が力強さを徐々に見せ始めていくのは、この頃からだろう。北周朝内部の権力抗争は、その強固な府兵制にはほとんど影響していなかったようだ。

さて、この頃宇文護は、どうしていたのか。「明帝本紀」には、宇文護について、

二年春正月乙未、大冢宰・晋公護を以って太師と為す。

三月：雍州刺史を改め雍州牧と為す。

夏四月己巳、太師・晋公護を雍州牧と為す。

等と記される。太師は正九命だから、大冢宰の正七命より品秩は昇進したことになる。そして、四月には、都長安に隣接する大都市・雍州の長官に転じている。これは何を意味するのだろうか。

前の皇帝、孝閔帝が即位した時、帝はまだ十五歳に過ぎなかった。であればこそ、先代宇文泰は「嗣子を輔する」(『周書』文帝本紀)よう、宇文護に遺命したのである。しかし、明帝の場合はもう二十四歳になっている。しかも、前述の「詔」や言動に見られるように、非常な聡明さと仁徳とを兼備していた。補佐役宇文護の出る幕などなかったといえる。そこで、宇文護は自ら品秩上の昇進と長安に継ぐ第二首都たる雍州の長官となることで、この新しい状況下での政治力の保持をはかろうとしたのだろう。ともかくも皇帝の玉座を脅かす危険な影が遠ざかったことで、

ようやく権力機構に一本化の見通しが生まれ、北周朝は盤石の体制を敷き始めていくかに見えた。

七月、臣下が瑞祥の三本足の鳥を献上。八月には群臣が上表し、ともにこの吉事を慶賀しあった。軍政重視だった宇文護とは対照的に、文治を中心とした明帝の新体制は、次第に人々の心に明るい日差しを運ぼうとしていた。やがて明けて、武成元（五五九）年、春正月。この若くて英邁な天子は、ついに政治の実権の相当部分を回復する。「太師・晋公（宇文）護、上表して政を帰す。帝、始めて万機を親覽す。軍旅の事は、護、猶お焉を総ず」（『周書』明帝本紀）という。しかし、宇文護は肝心の軍権は全く譲り渡す気配がなかった。また、この時「初めて、都督諸州軍事を総管と為」（同上）したとあるが、この総管については菊池英夫氏に論考がある。それを筆者の理解によって示せば、宇文泰以来自立的存在だった地方軍府を、朝廷の命の下に総管府として統合し直し、中央と州郡県との中間的機関として機能させ、中央の意向をより伝わりやすくしたものと考えられる。宇文護がこれらの地方軍府をも直接支配するのは、実際にはもう少し後の武帝の保定年間に入ってからだが、ともかくもこうした地方の諸軍権をも総括し得る地位に、この時点で宇文護が立った訳で、表の権力からは引き下がったものの、その代わりに隠然たる支配力の方はこれまで以上に増したことになる。

宇文護のこの時期における、地方軍府への指揮系統の強化の動きは、一体何を意味するのか。思うに、久しく自立的存在だった地方軍権に対し、新朝樹立のこの機会に兵制改革を行い改めて中央の下に再組織化せんとしたのではあるう。が、また「宇文護は深く之（英邁な帝）を憚」（『周書』宇文護伝）っていたということも、どこかで関連するよう思われる。即ち、些かこの出来過ぎの新帝への強い警戒心が、軍権の集中化を急がせる一因だったのではないか。そして、この不穏な気配を

孕んだ静かな対立の芽が、後に宇文護により引き起こされる、三度目の悲劇的結末をもたらすことになる。が、今は、それには触れないでおこう。

三月、帝は、「六軍を陳ね、…親しく甲冑を擐け、太白を東方に迎えられた」（『明帝本紀』）。そして、次々と軍令を発していった。また、かの大司馬Ⅱ国防相の賀蘭祥に、涼州に攻め入ってきた吐谷渾討伐を命じている。これには、国防省を一手に握る宇文護の意志や考えも無論反映していよう。ともあれ明帝サイドにすれば、宇文護の懐刀的存在の賀蘭祥が数ヶ月間にせよ国境周辺に移ったことで、朝廷内の政治が少しやりやすくなったのではないか。この辺りから明帝の澆洩たる政治が展開していく。

六月、大雨が降った。明帝は詔して述べた。

「長雨がひどい被害をもたらしている。麦やその他の苗を傷め、家屋を倒壊させ押し流し、水の災害が甚だしい。これは誠に朕の不徳の致す所であり、汝ら臣民の咎のゆえではない。考えるに刑法上の過失も、思い当たらない。これについて公卿・士大夫から地方長官や人民に至るまで、各々意見を差し出してほしい。たとえ直言・極諫とて、なんら忌むものではない。もしよく閲覽して、何か不備な点があれば、朕が天の責めを甘受しよう。水害に遭った者は、役人がよく巡回・調査して、各個別に朕まで知らせよ。」

（『周書』明帝本紀）

明帝の英明さをよく窺わせる詔といえよう。それに天も感じいったわけでもあるまいが、長雨はやっと収まった。明帝の仁君ぶりは、長らく待望した平和や栄光の世の到来を、広く国民に予感させたようだ。

この時の作と思われるのが、庾信の「晴れるを喜ぶ 応詔、勅により自ら疏韻（＝粗末な韻の意か？）す」だ。この作について、いつもはその制作年に意欲的に言及する倪璠注に、指摘が見られないのは不思議だが、逆にそれには消極的な呉兆宜の注には、珍しくはつきりと武成元年の大雨のことと明記する。この作品の内容を詳らかに読むに、新帝の登場への祝辞、また新帝が文学に理解のあること、水害に懸命な対策を講じられたこと等が述べられている。それに全て該当するのは、明帝の武成元年六月のこの時しかないようだ。倪璠の沈黙にも何か理由があるのだろうが、まずはともかくその内容を一瞥し、その後で制作年の考証を少し詳しく行うこととしたい。この作品も、これまでほとんど取り上げられておらず、原文は難解な表現で判読が難しいが、今、仮りに訳詩を掲げる。

新皇帝 ご即位の予言の符よ

真に よく的中せらる

その大いなる ご政道

ここにお建てにならるるは めでたし

新帝は 昔 雷沢で漁し

負夏で それを商われし

古代の聖帝・舜の再来か

はたまた 柏梁台にて 群臣集め

詩文の会 催した漢の武帝のよう

それとも 六人乗りの早馬を

都まで駆けさせし 漢の文帝か

自然の麗しき秩序は

御辯誠膺錄

維皇称有建

雷沢昔経漁

負夏時従販

柏梁驂駟馬

高陵馳六伝

有序属賓連

無私表平憲

河堤崩故柳

秋水高新偃

心斎愍昏墊

瑞祥たる 賓連樹にまで及び

陛下の無私のお心は

この世に 公平な規範を示さるる

今回の大雨で

堤防の古い柳並木崩れ

造成なつた新堰に

秋の鉄砲水のごときが 高々と押し寄せける

陛下は 大層お心傷め

こたびの水害 哀れまれ

あまたの楽しみ事 退け

民の恨みに 同情さる

寺院も懸命に

天災に効果ある 高論連ね

勝れた仏法の弁論 開陳せる

おかげで 王城から 水は引き

洛水より めでたい「河図」の現れ 献上さる

大地に戻りし水は

深い穴に再び帰り

吹き荒れた風も

今は 元の状態に復せけり

桐の枝は 以前に比べ長く伸び

蒲の茎も さらに何寸か高くなる

山の深き藪よ

病みし体 憩わせるには 最適ぞ

楽徹憐胥怨

禪河秉高論

法輪開勝辯

王城水闘息

洛浦河図献

伏泉還習坎

帰風已回巽

桐枝長旧困

蒲節抽新寸

山藪欣蔵疾

幽棲得無悶

有慶兆民同

論年天子万

そこに幽棲すれば

きつと 命の洗濯いたせよう

この慶びを 億兆もの民が 分かち合い
新帝の世の 万歳なるを 唱えあう

右に、作品の繫年に熱心な倪璠が、この作品に関しては何も言及しないことに疑問を呈したが、さらに『庾子山集注』の倪注全体にも目を通してみると、「庾子山年譜」の北周・宣帝の大象二（五八〇）年、庾信68歳の条に次のような倪璠の記述が見られる。

（四月）壬午、（宣帝は）中山に幸し雨を祈る。雨降る。（倪璠）按ずるに、（庾信の）集中に「晴れるを喜ぶ 応詔」「顔大夫の《初めて晴れる》に同ず」「趙王の雨を喜ぶに和す」「李司録の雨を喜ぶに和す」の諸篇有り。明帝二（五五八）年自り、（次の武帝の）保定三（五六三）年、建徳元（五七二）年、二年に、並べて雨を祈り、雨を喜ぶ事有り。子山の諸詩、『文苑英華』『芸文類聚』の一（＝双方とも同じように、天文・雨といった事類毎に分類し、編年体になっていない）に処するを以って、未だ何年に作る所のものかを詳らかにせず。故に焉に備録す。

つまり、倪璠は、『文苑英華』『芸文類聚』ともに、「雨」「天文」といった項目毎にこれらの庾信詩をまとめるにすぎず、「晴れるを喜ぶ 応詔」詩を、明帝二（『周書』『北史』には、明帝の武成元年と明記されるから、これは倪璠の誤りだろう。）年の作と特定はできない。そこで、年譜の末尾のこの部分に全部まとめて掲げたというのである。

倪璠注に「明帝二（五五八）年自り、（次の武帝の）保定三（五六三）年、建徳元（五七二）年、二年に、並べて雨を祈り雨を喜ぶ事有り」と記されてはいるが、改めて『周書』本紀中に記される「雨」の記事を全て調べてみると、「明帝本紀」中には右の一例のみ。「武帝本紀」中には、次の五例が記される。

保定二（五六二）年二月「久しく雨ふらず」

保定三（五六三）年五月「雨」

建徳元（五七二）年五月「大干：其の夜に雨の澍ぐ」

建徳二（五七三）年七月「春の末自り雨下らず、是の月に至る。：戊子雨。」

戊子雨。」

建徳三（五七四）年七月「京師、雨の連ねること三旬。是の日霽れる。」

となっていて、保定二、建徳元・二年は旱魃だと分かる。そこで、これらは対象外とする。保定三年の場合は、単に「雨」としか記さず、詳しいことは不明だ。ただ、この時の武帝には、「雨の詔」はない。さらに他の列伝も調査してみると、『周書』卷47黎景熙伝に、

保定三年、：春夏大旱にして、公卿百寮に詔して、得失を極言せしむ。

とあって、当時は明らかに大旱魃だったことが分かる。とすると、この時の「雨」は大水を引き起こすような雨だったかどうか。「慈雨」の方だったかも知れない。少なくとも、天子が水害への配慮を払うまでもなかった「雨」なのではと思われる。さらに建徳三年の大雨の時だが、

この時も武帝の「雨の詔」は記されていない。

一方明帝の時は、自ら「雨の詔」を宣布されるほどの劇甚な被災だった。この詔中で、明帝が「これについて公卿・士大夫から地方長官や人民に至るまで、各々意見書を差し出してほしい。たとえ直言・極諫とてなんら忌むものではない」という要望を出したのに応じ、『周書』を調べていくと、儒臣・楽遜がくそんが早速「十四条」を陳べたという記事が見られる（巻45 楽遜伝）。この庾信の「晴れるを喜ぶ」詩の内容からすれば、それくらいの大被害及び天子の憂慮がないとおかしい。さらに、本詩の冒頭にいう「膺録ようろく（＝膺録、膺図）」は、籙ろくや図と（＝天子となるべき予言の符瑞）に膺（＝合致）する意で、新帝の即位後そう遅くない時期であることを物語る。もし明帝の武成元年なら、その即位後一年九ヶ月しての大雨となる。それに比べ武帝の建徳三年の場合は、即位後五年も経過しており、時期を完全に失している。加うるに、庾信が武帝に対し「応籙」を明言するのは、武帝即位直後の保定元年五月の時で、「晋陽公が為に玉律秤尺斗升を進める表」に、「伏して惟たゞうに皇帝の、籙に応じ天に馭するは、…」とある。以上の考察からすれば、本「晴れるを喜ぶ」詩は武帝期のもではありえず、明帝の武成元年の時の作とほぼ断定できさる。

この「応詔」詩の制作年の特定により、庾信がこの英邁な明帝の登場により、武成元年の六月頃には暗い心情を脱して、少し前向きになりつつあったらしい様子を確認することができよう。またこの詩からは、北周初期の粛清の続いた暗い世相を濃い雨雲とともに吹き払い、新しい御世の誕生を寿ごうとする、国民一般の晴れやかな表情を感得することもできよう。明帝は、北周朝の二代皇帝として、意欲的に采配を振るい始めたようだ。国家には、新鮮で魅力的な風が吹き来たるようになっていた。明帝の命により作らさせられた「応詔」詩とはいえ、庾信はこの「天

子」に好感を抱き始め、その御世の永えにあらんことを詩に託したのだろう。また詩中の「柏梁、駟馬を驂はせ…」は、漢・武帝の有名な柏梁台の故事を踏まえ、明帝の文学好きを称えたものである。それは、翌年、庾信・王褒らを中心とした例の「麟趾殿」での華やかな文学サロンへと、早くも開花していく。

さらにもう一つ重要なことは、ここで庾信が明帝を「天子」と敬称し、もはや「哀江南賦」のように「大將軍」などと、妙に貶した表現をしていないことに注意せねばならない。ここ数年來、「哀江南賦」等の三部作や「思旧の銘」などで、旧梁臣や自らの亡国の恨みや密かな報復心、さらに望郷の情等を綴ってきた庾信だったが、胸中の鬱屈を一挙に吐き出したのに合わせるかのように、世の中の方も明帝の登場によりようやく落ち着きかける気配を見せてきた。そうした時局とも並行して、庾信らの心も次第に前向きになろうとしていたことを、この「晴れるを喜ぶ」詩の一篇は示すように思われる。

武成元年八月、官制上の大きな変革があった。『周書』「明帝本紀」に、「（八月）癸丑、御正四人を増し、上大夫に位す」とあるのがそれである。さらに、『同』巻32申しん微び伝にも、

明帝は、御正を以ってしりん（＝天子の詔）を任にん総そうせしめ、更に其の秩ちかを崇たかめて上大夫と為す。員四人。大御正と号し、又（宇文泰の幕下で尚書右僕射などを務め、詔勅の仕事の経験豊富な）微びを以って之と為す。

とある。この記述は、孝閔帝の時代には御正中大夫までしかなかったものを、その上に新たに上大夫を増設し、大御正と号したことを意味する。これについては、谷川道雄氏が「（御正とは、）天子の側近にあって、い

わゆる王言を直接に受けて下達する役目だったのでないか」とされた上で、これは「時の執権宇文護に抗して、帝権回復を図ったもの」と推測されている。^⑫

谷川氏の御正の職掌に関する指摘は、王仲犛氏が40余年をかけて編集した『北周六典』天官府・御正上大夫の項を見ると、その事実を一層明確にすることができる。

○（武帝の保定年間の初め？四年？）天子（＝武帝）は、公（＝司馬裔）の操履（＝行状）の忠勤にして、儀刑の亮直なるを以つて、乃ち徴して大御伯と為し、尋で大御正に転ぜしむ。…枢機に近侍し、絲言を出納し、所謂多く旧章を識り、殿中に双ぶ者無し。（庾信「周大將軍司馬裔神道碑」）

○（李昶は）保定二年、御正中大夫に転ず。時に、清要（＝天子のお側の意か？）に近侍し、盛んに国華（＝国家的栄典の文の意か？）を選ず。乃ち昶を以て納言（＝禁中書記官）と為さしむ。（『周書』李昶伝）

○武帝、親しく万機を総覧するや、内史下大夫を拜し、小御正に転ず。（趙）芬、故事に明習し、朝廷に疑義する所有る毎に、衆の決する能わざれば、輒ち芬、評断を為す。その善きを称えざるは莫し。（『隋書』趙芬伝）

これらよりすると、御正の官が、天子の側に仕え王言を受けたりそれを書き記したり、また意見を上奏したりする職掌だったことが確認される。春官府に内史というれっきとした文書官がいるのに、この種の執務

官を今までよりも充実させたということは、単なる文書方面のことだけではなく、皇帝の意向に直接関わる重要部署の権力の強化が目的だったことを意味しよう。

では、その真の狙いは何だったのか。これについて詳しい解釈はまだなされていない。今、『北周六典』より、当時「御正上大夫」に推挙されたのではないかと思われる四人を調べ出すと、既述の申徽を除けば以下の三人が掲げられる。

○晋公護、既に孫恒・李植等を殺し、（叱羅）協を徴して朝に入らしむ。即ち、軍司馬を授け、尋で転じて御正を治めしむ。世宗崩するや、便ち協に司会中大夫を授く。（『周書』叱羅協伝）

○（明帝の）武成元年、入りて大司空と為り御正を治む。進んで魯国公に封ぜられ、宗師を領す。甚だ世宗の親愛せらるる所と為り、朝廷の大事は多く共に議す。（同 武帝本紀）

○武成二年、徴されて御伯中大夫を拜す。徙りて御正を授かる。（同 鄭孝穆伝）

魯国公（＝後の武帝）が、武成元年八月に大御正に就いたのは明らかで、叱羅協も、この文脈からするとほぼ同時期に就任したように思われる。が、鄭孝穆は、果たして武成元年の「御正」の改革の折に任官したのか、それとも明帝の死後なのか、明確ではない。従って、明帝の命で御正上大夫に就いたのは、申徽・魯国公・叱羅協の三人と一応確認される。

この三人をよく比較して見ると、詔勅に精通する申徽はともかくも、

あとの魯国公・叱羅協の二人は、文書業務ではむしろ素人であろう。明帝が、賢弟・魯国公をこのポストに据えたのは、詔勅への事務的熟達のためなどではなく、むしろ自己の片腕として共に朝議を進めていくためだったろう。その意味で、帝権の強化を眼目とするものであったことは疑い得ない。しかし、この一見不必要な「御正上大夫」の増設の裏にある、政治的な隠された意図を宇文護が読めぬはずはない。これに対処すべく宇文護は、己の第一級の側近・叱羅協を、いわば明帝Ⅱ魯国公の牽制役としてこのポストに送り込んだ可能性がある。が明帝は、宇文護Ⅱ叱羅協の監視を受けつつも、己の志向する政治をさらに推進していくのだった。

折しも、御正中大夫の崔猷^{さいゆう}が、それまでの天王に代わり皇帝の称号を、またそれまでなかった年号の使用を具申、朝議を経て以後実施に移された。明皇帝の誕生である。これについて、『周書』明帝紀には、その建言者の名前は記さないが、『同』巻35の崔猷伝の方には、その氏名・経緯等が詳しく記される。崔猷は、それまで「深く晋公護の重んぜらる所と為り」、三女を宇文護の養女にしてみらうほどだったが、彼は元来天下国家のことに關しては、公正であるべきと心得ていた人物だった（同上）。御正中大夫の崔猷の建言を機に、皇帝の専制による北周王朝が名実ともにスタートしたといえよう。同九月、宇文招^{うんしょう}が趙国公に、また宇文迪^{うんてい}が滕国公になり、ここに後の庾信との深い親交の端緒も生まれるのである。

ここに至るまでの庾信の苦闘は、短いようでも精神的には極めて長いものだったに違いない。入北後三年に及ぶ憂悶の果てに、太祖・宇文泰との出会いを機に西魏に帰順。太祖との短い親交を経て、予想もしない太祖の崩御に直面。そして、北周朝の樹立とともに始まった度々の政権闘争の嵐の中で、自分の居場所を見いだせないまま、旧梁臣らとともに

祖国の過去の栄光と破滅の歴史を回顧し、深い傷心を秘めつつ、今後は心静かに生きたいと郷里への帰国を願いつつ、彼の人生は不安の中にも希望に向かつて少しずつ歩みだすこととなり、そしてまもなく大きな変化に立て続けに直面しようとしていたのである。

注

- ①拙稿「北周・孝閔帝期の庾信」（下）（『愛媛大学教育学部紀要』Ⅱ-27-2 95）第三章を参照されたい。
- ②拙稿「北周・孝閔帝期の庾信」（上）（『愛媛大学教育学部紀要』Ⅱ-27-1 94）第一章を参照されたい。
- ③中野将氏「庾信〈思旧銘〉について」（『中国文化』42 筑波大学漢文学会 84）は、この作品が「思旧賦」や「墓誌銘」の形式を取らなかつた背景として、「銘」の形式の諸特性を掲げながら論ずる。筆者は、氏の論点のうち金石に刻んで永遠に伝えんとしたことを最も重要な要因と考える。なお蕭永の経歴についての氏の注記が参考になる。また氏によれば、蕭永は王褒と義兄弟になる。
- ④この外に、錢鍾書『管錐編』第4冊（中華書局 79）、261条「全後周文」巻12に、庾信「思旧銘」と「哀江南賦」の關係、及び陸機「嘆逝賦」との關連について簡単に言及される。銘の文体が取り上げる内容について、特に制限がないことについては、釜谷武志「漢魏六朝における〈銘〉」（『中国文学報』40冊 89）がある。
- ⑤鍾優民『望郷詩人庾信』（吉林大学出版社 88）第九章、227頁を参照。
- ⑥許逸民校点『庾子山集注』（中華書局 80）による。
- ⑦拙稿「庾信〈哀江南賦〉論——その主題・構成及び制作年代——」（『集刊東洋学』66号 91）に示した「哀江南賦」の構成表の節数による。
- ⑧拙稿「西魏下における庾信のレジスタンス」（『集刊東洋学』59号 88）第一章を参照。
- ⑨前掲「北周・孝閔帝期の庾信」（上）第二章を参照されたい。
- ⑩拙稿「庾信における世界の解体と新生の表現」（『史記』《漢書》の再検討と古代

社会の地域的研究』 科研報告書 愛媛大学 94) を参照。

⑩拙稿「梁朝社会下の庾信」(『愛媛大学教育学部紀要』Ⅱ-19 87) 第四章を参照されたい。

⑪菊池英夫「唐折衝府の分布問題に関する一解釈」(『東洋史研究』27-2 京都大学 68) 第四章(イ)「北周の総管府」を参照。また中村淳一「北周明帝期の兵制改革と宇文護について」(『東洋史論集』4 立正大 90) も参考となる。

⑫谷川道雄「周末・隋初の政界と新旧貴族」(『隋唐帝国形成史論』 筑摩書房 71) 第一章を参照。

⑬王仲犛『北周六典』(中華書局 79)。

(続く)

(一九九五年四月二十八日受理)